

## 歌川国芳「通俗水滸伝豪傑百八人之一個」と中国絵画について

鄔松林（神戸大学）

歌川国芳（寛政九年（1798）～文久元年（1861））は、幕末に浮世絵師として活躍した歌川派三大巨匠の一人である。文政十年（1827）加賀屋によって出版された大判錦絵シリーズの「通俗水滸伝豪傑百八人之一個」（以下、本シリーズ）により、その武者絵師としての地位を築いたとされる。しかし、本作に関する詳細な先行研究は未だなされていない。ただし、近年の浮世絵研究において国芳への注目が高まり、関連研究の進展は更なる研究を生み出している。本シリーズの特徴の中でも、最も注目すべきなのは豪傑の造形において中国絵画を参照していることであろう。先行研究において、国芳が参照した中国の水滸伝絵画としては、陳洪綬の「水滸葉子」と陸謙の「天罡地煞図」の二作が指摘されている。しかし、陸謙画と陳洪綬画との関連についても、未だ考証されておらず、国芳の中国絵画受容の実態が明らかになったとは言い難い。

そこで本発表では、まず、国芳の水滸伝絵画を陳洪綬、陸謙の作品と比べ、新たに図像の引用関係を論じてみたい。また、豪傑の造形に人物の身分差が反映されていることや豪傑を武者のような造形で描き出す意図を論じる。その上で、人物の服装の装飾性と装飾文様の象徴的な意味、更に作品に反映されている幕末の江戸の民衆の美意識について検討する。そして、国芳による豪傑の造形表現や創作意図を考察しながら、本シリーズの日本の水滸伝絵画における位置を明らかにする。

まず、本シリーズが参照した中国絵画の中では、陸謙による人物像の表現において既に陳洪綬の受容が見られることを指摘する。このことから国芳の陳洪綬「水滸葉子」の受容については、陸謙を通じたものと陳洪綬を直接受容したものを弁別しながら考察する必要がある。そのように比較検討すると国芳による朱武像、陸謙「天罡地煞図 公孫勝」、陳洪綬「水滸葉子 朱武」という三作において、国芳による朱武の服装や裸足の造形、手に持つ古剣、宝壺の表現、また妖怪の図像などは、陸謙の表現により近いことを確認できる。また国芳による馬麟像は、怪獣を取り押さえる姿が「天罡地煞図」の謝珍像に触発されたことを確認できる。以上のことから、国芳は陸謙にしかない表現を引用していることがうかがえる。

次に、国芳は意識的に豪傑の衣装の着方や色彩などで豪傑たちの身分を暗示している。さらに衣装の表現に関しては、国芳は戦闘の際中の豪傑の衣装を意図的に描き分け、豪傑の身分、序列および梁山泊に加わる前後の印象の転換が反映される。そして、衣装の模様に関しては豪傑の性格や剛猛さが反映されている。文様の選択は日中両国の伝統的模様、特に日本人に馴染みのある中国風の要素がある文様を参考にし、幕末の人々の美意識を反映させる。国芳は日中の先行絵画を学ぶと同時に水滸伝を幕末民衆の嗜好に応える武者絵として造形することで新境地を自ら開拓したと結論できる。